

自分達でまちの課題を考えよう ～関西湾岸 SDGs チャレンジ 和歌山県～

和歌山市の高校生3名と甲南大学生4名の総勢7名で「チーム 芽 de 鯛(めでたい)」を結成し、和歌山市の加太(かた)地区の社会課題を解決するための調査を実施し、アイデアを提案しました。

まず、2019年7月14から15日の合宿会議で、SDGsについて基礎を学び、和歌山市役所の方からこれまでの取り組みについてレクチャーを受けた後に、加太地区について高校生と大学生が事前に調べた内容を共有しました。加太地区には、ジブリの「天空の城ラピュタ」の実写版と巷で有名な友ヶ島、伝統的な一本釣りで有名な加太の鯛をモチーフとした「めでたい電車」など、魅力的な観光資源が数多く存在しています。一方で、高齢化が日本の全国水準より高いこと、今年の小学校入学者数が一桁であるなど、少子高齢化や空き家の増加に頭を悩ませておられます。



次に、8月6から8日の3日間で、加太地区に赴き、加太の魅力と課題の実態を調査(フィールドワーク)しました。加太地区連合自治会、加太まちづくり会社、カフェ「セレーノ」、東京大学加太分室地域ラボ、加太語り部くらぶ、和歌山市役所などからお話を伺ったところ、「若者をたくさん呼び込みたい」、「加太のお土産を作りたい」など住民の皆さんの生の声を伺うとともに、加太を良くしようと様々なことに日々取り組んでおられることを実感しました。朝日新聞社の記者の方にも助言を受けながら、地域をよりよくするアイデアを練りました。



フィールドワークの後、高校生と大学生がビデオ通話で2時間程度の会議を週1回開催しながら、加太の地域の活性化策について検討を重ねました。

9月の最終の成果発表会では、東京大学の分室の取り組みにヒントを得て、「研究者が集う加太」というコンセプトを提案しました。豊富な加太の地域資源は、研究者にとっても調査対象の宝庫であることに気が付いたのです。

若手研究者が「関係人口」となって、加太の魅力を発信する住民の皆さんのお手伝いをしながら、郷土資料や研究成果をビジネス化する事業を発表しました。

初めての企画作りは分からないことばかりで、発表資料の作成では論理的に説明する大変さを実感しました。それでも、全員がお互いに助け合い最後まで諦めず努力した結果、見事、最優秀賞を頂くことができました。

参加者：【甲南大学】文学部2年生 長澤 希、マネジメント創造学部2年生 玉井 美乃梨、経営学部1年生 陽川 ひかり

【市立和歌山高校】2年生 橋本 明香里、中野 美咲、1年生 八木 莉純、上田 ひかり
指導教員：甲南大学共通教育センター 特任准教授 岡村 こず恵